

有益な話し合いをするには

The purpose of this research is to discover the method of “beneficial discussion”. After we examined previous research, we were interested in ‘facilitation’ and the role of the ‘facilitator’ in discussions and decided to focus on them. The research methods were to examine previous research, to record video of discussions and analyze it. In the video, the discussion was carried out by one facilitator and four participants. When we analyzed the video, we found that it is important for a facilitator to create an atmosphere in which participants can state their own opinions easily. We can therefore conclude that to create an atmosphere in which participants can easily state their opinion, the facilitator ought to trust participants and to be in a neutral position.

1 はじめに

本研究では、「集団」についての調査をしたいと考えた。そこで、問いのない答えに対応するための有効な手段であると考えられる、話し合いについて焦点を当て、研究をした。

(1) 問い

本研究の問いは「有益な話し合いをするにはどのようにしたらよいか」である。ここでの「有益な話し合い」とは『全員が自分の意見を明確にした上で、合意形成をすること』と定義する。

(2) 仮説

中澤秀雄※1によるとシナリオのない「場」をつくる上で、ファシリテーション、ファシリテーターの役割は非常に大きいという。そこで「ファシリテーション」、「ファシリテーター」に着目し、有益な話し合いにおいて、「意見を出しやすい雰囲気を作ること」と、「話し合いがずれないように出発点と終着点を明確にすること」が重要であるという仮説を立てた。

(3) 定義

本研究において、堀公俊※2よりファシリテーションを「集団による問題解決やアイデア創造などのあらゆる知的創造を支援し促進するはたらき」、ファシリテーターを「ファシリテーションを実行する、話し合いの結論を決めるのではなく、話し合いの流れでリーダーシップを発揮する人」と定義する。

(4) 先行研究から

先行研究から、ワークショップにおいてファシリテーターの存在が重要であり※3、体験学習における振り返りの際に学習者の体験を概念化し、知識化するために、一方的な指示や教示をするのではなく、参加者やチームの話し合いの過程に着目しながら体験と学習を結びつけることがファシリテーターの役割である※3とされていることがわかった。また、話し合いの場では、全員がありのままでいられる話しやすい雰囲気であることが重要である※4とされていることがわかった。そして、ファシリテーターは、身分や役職、性別、年齢による威力的行使を排除し、意見に偏りがある場合や全体の発話量が少ないときは、意見の「発散」を促進する必要がある、逆に、意見の偏りが少ない場合や全体の発話量が多いときは意見の収束を促進し、相手の経験した事実や、そこから生じた感情をしっかりと聴く、受け入れる必要がある※5と考えられていることがわかった。

そこで、これらを踏まえて以下の通り調査方法を考えた。

2 調査方法

「話し合い」や「ファシリテーション」に関する先行研究を調べ、更に外部の方からの話を聞いて、わかったことを参考にして、「有益な話し合い」の評価の基準を決めた。

基準は以下の通りである。

- ①相手の意見を途中で遮ることなく最後まで聞いているか
- ②相手の意見を頭ごなしに否定していないか
- ③意見を出しやすい雰囲気ができているか

- ④実際に自主的に意見が出ているか
- ⑤議論の出発点と終着点が明確であるか
- ⑥議論のそれぞれのプロセスの時間配分が適切であるか
- ⑦議論の結果に対して全員が納得できているか

その後、実際にファシリテーターを中心とした話し合いを行っている動画を撮影した。今回撮影した話し合いは、本校で2023年12月に行われた「武生高校125周年記念講演会『藤田晋×武校生トークバトル』」に向けてのものであり、「トークバトルとはどのような時間か」というテーマで、ファシリテーター1人、話し合いの参加者4人で行われた。

そして、作成した①～⑦の評価の基準をもとにして、その動画の様子を評価した。

3 結果

(1)結果1(発話の自主性)

評価の基準④「自主的に意見が出ているか」について評価、考察した。動画の中では、会話のフェーズごとに、その会話を開始させる発言があったが、その発言が「自主的」なものであったか、それともファシリテーターに促されて発せられた、「非自主的」なものであったか、を数えた。結果は、図1より「自主的」が4回、「非自主的」が8回というものになった。

会話の始まり(回)

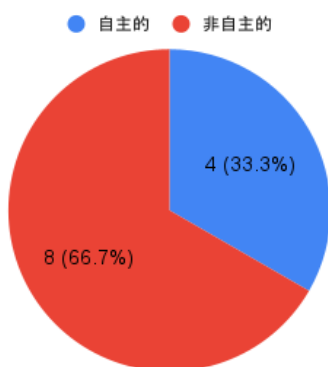


図1

(2)結果2(発言数)

評価規準③「意見を出しやすい雰囲気ができているか」について評価した。今回の動画では、ファシリテーションを行った人数は5人であり、ここではファシリテーターをF、残りの参加者をそれぞれA、B、C、Dとする。図2から、ファシリテーターの会話数が圧倒的に多く、次いでCさんの会話数が多いことがわかった。

参加者の発話数

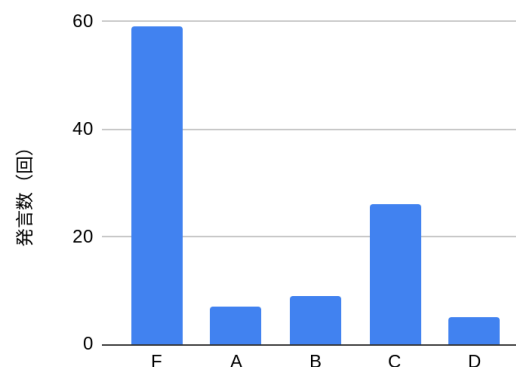


図2

4 考察

(1)動画の分析から自主的な発言が少なかったとわかったが、その理由としてファシリテーターが常に参加者に話を振るという形式で話し合いが行われており、参加者がファシリテーターから話を振られるのを待っているという状況ができてしまっていたということが挙げられる。そもそもファシリテーターが話を振って話し合いが進行するという形式になってしまった理由としては、ファシリテーターが沈黙を恐れ、なんとか場が静まり返らないように喋り続けたからであると考えられた。よって、ファシリテーターは沈黙を恐れず、話し合いの参加者が自分の意見を自主的に話してくれることを信頼することが重要であると考えた。

(2)動画の分析から参加者の発言数が偏っていたとわかったが、その理由として、ファシリテーターの発話数が圧倒的に多かったのは、上記の考察が原因であると考えられ、次いで、Cさんの発話数が多かったのは、話し合いの場に意見を出しやすい雰囲気ができておらず、ファシリテーターと交友関係のあったCさんしか積極的に意見を出せなかったためであると考えられる。特定の人ばかり発言していると意見が偏ってしまうため、ファシリテーターは普段の関係性に左右されず、中立な立場で居続けることが必要であると考えた。

5 結論

有益な話し合いをするためには、全員が安心して意見が言える雰囲気づくりをする必要があり、そのためにファシリテーターは中立の立場を取り続け、相手を信頼することが重要であるとわかった。

6 課題

評価をするために撮影した動画と、今回作成した評価の基準とでは、動画の内容と評価の観点の項目とが完

全には対応せず、評価の基準を活かしきることができなかった。

7 今後の展望

上記の通り、今回使用した動画では、評価の基準を活かしきれなかったため、自分たちで、評価の基準を活かせるような話し合いを企画して、それを評価したいと思った。

また、今回はファシリテーター目線での有益な話し合いについて考えたので、今後は話し合いの参加者目線での良い話し合いについて考えたい。

さらに、評価した話し合いがどれぐらい良いのか、悪いのかをより明確にわかるようにするために、それぞれの観点から、話し合いに点数をつけられるような工夫をしたい。

参考文献

※1中澤秀雄

「コモンセンス・ファシリテーターとしての社会学」
現象と秩序第4(2016.3)p7

※2堀公俊

「ファシリテーション入門」
p23-26 p81-88

※3清水崇博 井庭崇

「体験学習におけるファシリテーションのパターン分析」

※4安斎勇樹 青木翔子

「ワークショップ実践者のファシリテーションにおける困難さの認識」

日本教育工学会論文誌 2018 p231-242

※5・清水崇博 井庭崇

「体験学習におけるファシリテーションのパターン分析」(2006)

社団法人 情報処理学会 Vol.58

No.24 92

・大本正義 戸田泰史 植田一博 西田豊明

「議論への参加態度と非言語情報に基づくファシリテーションの分析」(2011)情報処理学会論文誌

Vol.53 No.12 3659-3670

・長畑誠

「ファシリテーション再考～『ファシリテーター』から『ファシリテータティブな場作り』へ～」(2015)

明治大学公共政策大学院ガバナンス 研究科

No.11 10-11

謝辞

本研究をするにあたり、ファシリテーションや話し合いに関する様々なご教示を頂いた、福井大学教育学部准教授の遠藤貴広様、発創デザイン研究室の富永良史様に深くお礼申し上げます。